

幼児の社会性に関する一考察(2)

「遊びに加わる」ことについて

上垣内 伸子

前回は、子ども同志の『出会い』が、相手を受け入れること、触れ合うこと、行動を真似することなどによって発展していった事例を紹介した。しかしながら、なかなか遊びの輪に入っていけなかったり、人との関係を持ちにくいこともある。『友達と遊べない』『仲間にはいっていけない』ことを困ったことと感じて悩むこともある。

この『友達と遊べない』というのはどういう状態なのだろうか。本当に遊べていないのだろうか。今回は、なかなか友達と遊べないといわれている子どもの集団参加の様子を手掛かりに、『遊びに加わる』ことについて考えてみることにする。

(1) 見つめる

△事例1▽

Y子は三歳近くになるがお母さんからなかなか離れら

れない。同じくらいの子どもたちと遊ぶ機会を持つとうと、母と二人で5月から月一回の『遊びの会』に参加している。この日の活動が9回目の参加である。

今回の遊びのテーマは「汽車ごっこ」。親子で段ボールに思い思いの飾りを付けたりして汽車作り。Y子親子も紙テープや色紙で制作を楽しんでいる様子だ。そのうち『段ボール汽車ぼっぼ』に入って引っ張ってもらったり、抱えて走ったり、狭い中に二人で縮こまって入って笑いあったりとにぎやかな活動が展開し始めた。

Y子も汽車に入って押してもらったり、他の子どもも汽車とぶつけて喜んだりしていたが、そこへもう一人の子どもが来てY子の汽車に乗り込んだ。厭がったY子は汽車から出ようとものがくが立ち上がれず、母を求めて手を伸ばして泣き始めた。母に抱かれてからも激しく泣き続け、その後『段ボール汽車ぼっぼ』には乗らず抱かれのまま他の子どももの動きを見ていた。

次にロープで作った汽車が登場し、子どもたちと保育者が次々乗り込んで走り始めた。みるみる長くなった汽

車はよろよろしながら進んで行く。母親達はトンネルになったり踏み切りになったりそれぞれ役割を取りながら、過ぎていく子どもたちに手を振っている。Y子の母も初めはY子を汽車に乗せようとしたがしがみついて離れないので、保育者と三人で駅を作ることにした。母が黒板に駅を描き始めると抱かれているY子も落ち着いてきて、「チュールリップを描いて」などと頼んだりしている。母は線路ぎわにチュールリップを映かせたり、上手にY子の注文も受け入れながら駅を描いた。黒板の前に机を置いてプラットホームを作るとすっかり駅らしくなり、降りる子どもやまた乗る子どもでY子の周囲は賑やかになってきた。Y子は母に抱かれたままだが、なんとなく面白そうに他の子どももの乗り降りの様子を見ている。興味を引かれている様子はあるのだが、母親や保育者が「乗ってみる?」「おいでー。」「一緒に乗ろうよ。」などと誘うとまたまたしがみついてしまう。

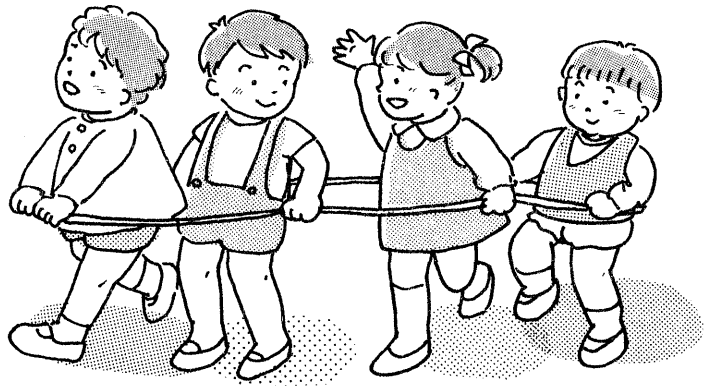
Y子を駅に残したまま汽車は着いては出発することを繰り返した。何度目かに到着した時、保育者が「りー

「ーん！まもなく発車しまーす。急いでお乗りくださいーい。りいーん！」とアナウンスした。駅で待っていた子どもたちが大急ぎでみんな乗り込んでY子一人になった。汽車に乗った子どもたちや保育者は、「早く早く！」「汽車が出ちゃうよー。」と手招きしながらY子を呼んでいる。すると、Y子はさっと母から降りるとするりとロープの中に入った。

「しゅっぱーつ！」子どもたちが全員乗り込んだ汽車はゆっくりと走り始めた。Y子はと見ると、先ほどまでとはうって変わった明かるい表情で走っている。「バイバイ」という母親達の声にも他の子どもと一緒に手を振って応じている。それから子どもたちと保育者を乗せた汽車は何周も何周も回り続け、歌を歌ったり言葉にならない歓声をあげたりと、楽しい気持ちもぐるぐると渦を巻いているかのようだ。Y子も顔を上に向け体をのけ反らせて笑っている。母親の前に来るとはにかんだように笑ってみせる時もある。

その日は、それから帰る時まで機嫌よく、母親から離

れて遊ぶことができた。



△事例2▽

E子は三歳になるが、ことはがでない、働きかけや指

示が通りにくいという子どもである。知らない場所へ行ったり気にいらなことがあったりと大声で泣くことがあり、母親はE子づれの外出に苦勞している。遊びを通じて人との関係を発展させたいと考えて、Y子と同じ「遊びの会」に参加している。

1回目の参加時は、建物に入ったときから泣いていて、子どもが集まっている中に入ると一層激しく泣いて母親に抱きついている。母親は、「やっぱり。いつもこうなんです。」といって困惑しながらもE子を抱いて他の子どもの遊ぶ様子を見ていた。昼食の時間にもE子は母親の背中にくっついたままおにぎりを食べていたが、背中越しにまわりの様子をみつめていた。

2回めは、部屋に入って来た時から泣かずにニコニコしていた。「今日は不思議なくらい機嫌がいい。」と母親も嬉しそうに言う。E子の表情は和らかな笑顔であるがその目はどこを見ているのか定まらない。視線が宙を漂っているかのようだ。そして、次々と遊びが展開していく部屋のをぐるぐると走りまわっていた。2回目

降、この遊んでいる集団のまわりをぐるぐる走ることがしばらく続く。「遊びの会」にはこれまでも多動傾向のある子どもの参加があり、周囲の動きにとらわれず勢よく走りまわる姿は見慣れたものだったが、それらとE子の動きはどこか異なっていた。多動傾向のある子どもの多くが直線的に力強く動くのに対し、E子のステップは軽やかで、足どりの視線も表情もフワフワとした浮遊感がある。保育者にとっては、その目的でない動きはとらえどころがなかったが、なんとなく楽しんでいるんだなという感じだけは伝わってきた。

何回かの参加の中で、次第にE子の走りに変化がみえてきた。初めは進行方向を向いて走っていたのが、遊び集団の方を見ながらの走り——つまり円の中を向いてツーステップで横向きに走るようになってきたのである。フワフワした笑顔はそのままだが、視線は宙を漂っていたのが、円の中心つまり遊び集団をみつめるものに変わっていった。その後もE子は他児の動きをみつめながらグルグルとそのまわりを回り続けたが、7回めの参加の

時、その円運動がくずれた。その日の遊びのテーマは、「新聞紙で遊ぼう」というもので、それぞれの親子が、新聞紙をビリビリ破いたりちぎったり丸めてボールにしたり、紙ふぶきをかけあったりした。大量にできた切れ端を大きなダンボールを集めると、テーブルの上からその中にジャンプすることが始まった。押しあいへしあいのしながら母親や保育者のかけ声で次々とジャンプが続く。自然にテーブルと飛びこむダンボールを中心とした動きの流れができあがった。E子は、初めはそれまでと同じように、他児のジャンプを見ながら周りを走っていたが、その足どりのままジャンプの流れの中に入っていた。一度飛んではまたしばらく周りを回るというものだったが、とぎれとぎれに他児の中に混じって遊び、その後、母親や保育者から紙ふぶきをかけられることを繰り返した。

「友だちと遊ぶ」とか「集団での遊び」といったことを具体化して思い浮かべるとき、それぞれが一つのテ

マに即して動く姿、何となく一まとまりになって遊ぶ情景をイメージすることが多い。「友だちと遊べない」という悩みを持っている母親は、自分の子どもがそうした集団の動きからはずれていることに問題を感じているようだ。けれど、果たして、遊びに直接加わることだけが「集団参加」と呼ばれるものだろうか。

Y子もE子も、原因は異なるが、いわゆる「友だちと遊べない子」である。Y子はなかなか母親から離れられず、他児の誘いかけに対しても拒否的でひきこもりがちだった。初めの頃、母親はうかない顔で、ベソをかくY子を抱くことが続いた。E子も、初めての場所に慣れないうちは泣くことが多かった。これらの行動は、拒否という形をとった集団への参加とはとれないだろうか。集団の存在が二人の心の中に明確にあるが故の拒否である。そして泣くことで拒否するという行動の後、「見つめる」ことが始まった。Y子は母に抱かれて、E子は集団の周囲を回りながら、他児の動きをとらえて見つめるという行為によって、遊びに参加していったように思

う。二人の「見つめる」行為の中には、拒否ではなく集団を受け入れようとする心があったのではないだろうか。拒否から受容への変化があったからこそ、一つのきっかけから遊びの動きの中へと入っていったように感じられた。

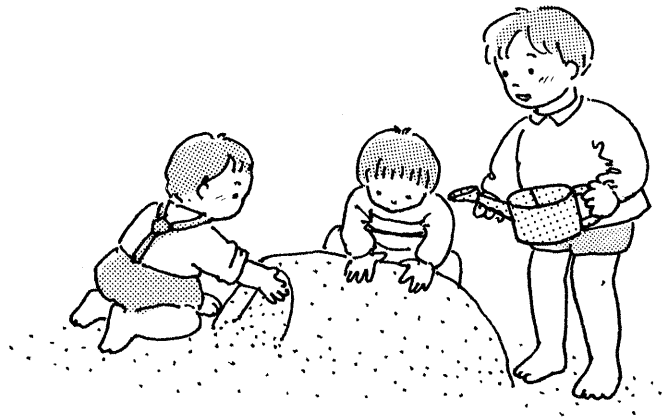
(2) 動きの共鳴

△事例3▽

S子は二歳すぎの女兒である。表情が乏しく、人からの誘いかけに応じることも少ない。同じく月一回の「遊びの会」のメンバーで、父母と三人で参加している。

「遊びの会」では、フィンガーペインティングや小麦粉粘土といった手が汚れる遊びや、ゆさぶりなどの動きの激しい遊びをすることが多いが、いずれもS子は苦手のようだ。

5回めは公園で砂遊び。はだしになって砂場に入るのは初めてのS子と両親は不安気な表情だ。型抜きなどして遊んでいたが、水が運ばれて池が作られ、数人の子ど



カット・佐藤 和代

もが泥の池に入って遊び始めると、母親は泥のかからない隅の方へS子を連れて行き、「すごいわねえ。S子あんなこととでもできないわね。」と驚いた様子で見っていた。

大きな山と山の間に掘った池にトンネルから水が流れこむ度に、中に入った子ども達は、おし戻したり土手をくずしたり水をくみ出したりと大騒ぎをしている。S子は母親にしがみついてその様子を見ていたが、そのうち足をムズムズ動かして砂にもぐらせ始めた。何度も抜いたりもぐらせたり砂を蹴ったり——手はしっかりと母親にしがみついたまま足だけ動かしながら池の様子を見ている。保育者が砂でS子の足を覆うとにっこり笑った。

S子にとっても母親にとっても、砂は興味をひかれる素材というよりも、汚れるという負のイメージを持つものであった。初めは手や足に砂がつくことをとても嫌がっていた。しかし、池で楽しそうに遊ぶ他児の姿を見た時、S子の中で少しずつ気持ちに変化していったようだ。「すごいわね」といいながらも拒否的な母親にしがみついて同調する一方、心の片すみに面白そうという気持ちが芽生えたのか足だけは砂の中で動き始めた。池の中の子どもの楽しさにS子の心が共鳴し、池の中の動き

にS子の足が遠慮がちに応じているかのようだ。たとえ池の中に入っていないなくても、S子は泥の池の遊びを楽しんだに違いない。

「遊びに加わる」ということは、直接集団の中に入っ
て活動することのみを表わしているのではないだろう。
Y子やE子やS子のように、遊び集団を拒否したり、見
つめることで自分の中にとり入れたり、距離を置いて動
いてみることも「参加」の一つの形であるように思う。
直接参加の前のウォーミング・アップともとれるようにし
た行動をゆっくりと育てていきたいものである。

(お茶の水女子大学)